

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

逸見重雄教授最終講義における挨拶

著者	栢野 晴夫
雑誌名	社会労働研究
巻	16
号	3-4
ページ	159-160
発行年	1970-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017883

逸見重雄教授最終講義における挨拶

栢 野 晴 夫

今日は、逸見重雄先生の最終講義でございます。

逸見先生は、昭和二十六年に旧中央労働学園大学が法政大学と合併致しました際に、法政大学に旧中央労働学園大学からわれわれと一緒にお移りになった訳でございますから、考えてみますと、約二十年近く法政大学で私どもと一緒に勉強し、かつ研究をなさって来られた訳でございます。逸見先生は、二十六年に合併がございましたから、その直後二十七年に学部長におなりになりました。三十一年まで学部長をお勤めになりました。ちょうど、その時は、社会学部が出来たばかりでございますから、法政大学という大きな世帯の中に馴染むこともなかなか難しく、また新しい学部で（おそらくは当時日本で始めてといつてよろしいかと思ひます、社会学部という学部が出来ましたのは、）したがひまして、社会的にも社会学部というものの内容がよく理解されておりませんし、いわば草創期の非常に難しい条件の中で、社会学部の成長と申しますか、社会学部を立派なものにするために大変な努力を重ねられた訳でございます。当時を思い起こしてみますと、募集を致しましても学生が集まりません。一番ひどい時には、第一次募集をして定員に満たない、第二次募集をして定員に満たない、とうとう第三次募集までする、というような状況がございました。今日、七千人から八千人の志願者があるということをおひびきしてみますと、まるで夢のような話でございますが、そういう、いわば草創期の社会学部をつくりあげるために逸見先生のなさいました御努力というものは、今日

の社会学部のいわば基礎を築かれた、といってもよろしいかと思います。

逸見先生は、大変謹厳な方でございまして、拝見しただけでも大変謹厳であるというふうに、みなさんもお考えになると思います。きびしい教育と、きびしい研究態度で一貫して今日まで御専門の研究に従事して来られた訳でございます。先生がここで社会学部の教授会のメンバーであることをやめられ、今日をもってみなさん方とお別れをすることになる訳でございまして、その意味では私ども、誠に残念に思います。お見受けしたところでも大変お元気でいらっしゃいまして、到底、七十歳をお迎えになったというふうには、私どもにはみられないのでございますが、大学の規定によりまして、退職なさるということになった訳でございます。どうか先生には、今後ますます御研究に御研究なさって下さい。先生はまだまだお若いし、去年はフランスに御出でになったりして、ますます矍鑠として御研究に励んでおられます。したがいまして、私どもは、これからの先生の生涯の研究をおまとめになることを楽しみにして期待しております。みなさん方も、どうか、逸見先生の今後の御健闘を心からお祈りをしていただきたいと思います。これから約一時間、先生の最終講義、ここにございますように「インタナショナルとフランス共産党」ということについて、お話があります。どうか、ご清聴いただきたいと思います。簡単でございますが、私の挨拶にかえたいと思います。